

有識者によるエンドパネルディスカッション

第1日目・2日目の参加者による自由討議の総括として、有識者4名によるエンドパネルディスカッションが行われました。

【コーディネーター】

西山 徳明 北海道大学観光学高等研究センター長

【パネリスト】

池 邊 このみ 千葉大学大学院園芸学研究科教授

菊 池 健 策 東京文化財研究所客員研究員

佐 藤 千 晴 フリージャーナリスト



【西山】

司会を務めさせていただきます、西山です。A班からD班までの議論の内容について、それぞれのコーディネーターの先生方に項目を立てながらご発表いただき、重複がある場合には省略していただいて内容をなるべく漏れない形で整理していきたいと思います。

それではまず私がA班を担当させていただきましたので、A班からです。最初のテーマは、「歴史文化基本構想（以下、歴史文構想）から文化財保存活用地域計画（以下、地域計画）への策定に向けた課題」ということです。歴史文構想から地域計画へのバージョンアップにあたり、従来と異なるのは、一つは計画期間、保存活用計画的な活用期間をきっちりと書くこと、そして、それに対する市町村の措置をしっかりと書くこと、この2つが求められます。議論に参加頂いた伝統文化課の中谷さんからは、この時限を決めていくのは、他の事業報告的なものではなく、数値目標を達成する時限目標というよりは、文化財に関しては様々な収集データの情報のアップデート等が5年ないし10年単位で必要となる、という意味との話がありました。メンバーからは、すなわち、歴史文構想と保存活用計画的なものを合体したものが地域計画であるという理解でいいのではないかという意見がありました。

一方で、「今までの構想であれば夢が描けたのだが」という意見が出ました。様々な想いを持つ民間の人や無形のモノ等これまで捉えにくかったモノに対してどうしようという夢が描けた。それは、約束をしなくても良いからだっただけで、必ずこうするとか、必ず保護するという約束をしなくても目標を立てることができた。そういう部分の歴史文構想の良さが、この地域計画で、時限を示すとか措置に絡めるということで消えてしまわないようにしてほしい、ということです。これに対しては、歴史文構想に書いたもの全てを保存計画に反映しなければいけないということではなく、歴史文構想の中でも戦略的にやりたいところを保存計画として取り上げて書き出していくという形で良いのではな

いか、という議論がなされました。

次に、自治体からの措置や支援にはどんなものがあるのか、ということで、一般的には歴史文構想を支持してくれる議員さんからの「（リストに挙げたのであれば）その文化財の保護にお金を出すべきだ」という議論に陥りがちだが、そうしてしまうと従来の文化財保護と同じ枠組になって、むしろ、歴史文構想や地域計画の首を絞めてしまうことになる。なので、保存や継承を補助金で行うのではなく、社会全体で考えることが必要である。クラウドファンディングや寄附金など、非常にユニークな民間の広告収入をうまく利用した社寺の無料Wi-Fiシステムもある、という話がありました。大事なことは、自治体の歴史文構想への支援は、まず金銭的な支援があるとしてもそれはやはり活用のために使うものであって、保存そのものに支援をするということとは一線を画することが、むしろ、この歴史文構想の良さを失わないことになるという話が出ました。それから、行政側は、行政が行う色々なインフラ整備や環境整備等を、歴史文構想を尊重する形で実施することに力を注ぐというように、公共事業を工夫するということがあるのではないかと。例えば、活用に関する支援としては、人的支援であれば協議会や団体のイベントに講師を派遣する、他の部局の補助金をうまく使うことに知恵を巡らす、といったことが必要ではないか。それが単なる文化財部局としてではなくて自治体全体として、歴史文構想なり地域計画を支えていくことになるのではないかと。例えば、文化庁で既存の事業を使うとしても、職人育成を名目にして実際には現場で修理を行うといった知恵があるのではないかと。などです。

それから、「潜在資源の活用」というテーマで、歴史文構想で拾い上げたモノというのは、どうしても今まで知られていないものが多く、その意味では民間で「NIPPONIA」という事業もありますけれども、未指定文化財ならできる、でも重要文化財や指定文化財ではできない活用というものを考えていくことができるんだ、とポジティブに考える。それから、先ほど言ったように、人の手で相撲をとる（他省庁、

他部局の事業等の応用)、ということに知恵を絞ることで、活用を考える。あるいは今回の法律で定められた文化財保存活用支援団体を活用していくことが必要ではないか、というような話が出ました。民間とのうまい協働が必要であるということについては、福岡市や尾道市の担当者の方から、NPOや広域DMOとの協働が事例として挙げられました。

潜在資源の顕在化には、昨日佐藤先生がおっしゃった「よそ者」の視点。例えば、女子高生・大学生、インバウンド・ツーリスト、アニメファン、といった人たちにきっちりとプロモーションしていくことによってうまく展開できる事例もある、ということでした。

私たちが議論できた最後の項目は、庁内調整や他部局とのコンセンサス形成、インナープロモーションということで、従来はどうしても観光部局との二項対立的な構造で語られてきましたが、今の時代はやはり文化財のことがわかり、観光のことが考えられる調整役が本来は必要である、ということです。しかし、なかなか実際にはそのような調整役はいないので、そうでなければ今度は市長部局に移す、というような極端なことではないまでも、市長部局との人事交流等を積極的に行うなど、やりとりする機会、結局は顔を合わせる機会を増やすことが一番大事であるということです。それがAグループの方々の経験的にみても、非常に効果を発揮している、比較的規模の大きな都市においてもそういう効果はある、ということでした。今まではなかなか文化財部局が観光部局に信頼されていなかった。要するに「彼らは保存するだけだ」ということになっていたのですけれど、今、そういう交流を越えた後は、やはり文化財を守って観光資源にしなければならないということを観光部局も理解し始めた。信頼し合うことが大事だということです。

そして、我々が議論できなかった残りのテーマは、市民周知をどうするか、関係者に歴史構想をどう理解してもらうか、関連文化財群(ストーリー)によって新たな価値を創出した良い事例はあるか、また、昨日の二条城のお話にもありましたが、「活用、活用」というけれど、どこまで許されるのかという線引きについて何かいい議論があるのか、これくらいの論点がありました。

もう一度言いますと、最初は、「地域計画策定の課題」、二つ目が「自治体からの支援・措置の仕組み」、三番目が「潜在資源の活用」、四番目が「庁内調整やインナープロモーション等」ですね。それから「市民周知」、「関連文化財群やストーリーの活用」、あるいは「活用の線引き—どこまで許されるのか」、こんなものが、Aグループでは議論されました。

では次、Bグループの佐藤先生、お願いいたします。

【佐藤】

Bグループは、昨日の懇親会でのすき焼き効果か、はたまた二次会、三次会の効果か、大変活発にコール・アンド・

レスポンスの形で話が進みました。なので、特に論点を定めて議論はしませんでした。それぞれの方が抱えている課題を提示していただき、それに対して知恵があれば同じチーム内から出てくる、という形であつという間に50分が過ぎました。いくつか論点めいたものがあるので、3つにまとめます。

一つは、「文化と観光について」。やはり、保存・継承を一番価値ある仕事とみなす文化財保護課と、観光課とでは、どうもカルチャーが違う。一体観光に対してどこまで妥協したら良いのだろうかという悩みが出てきました。ちょっと遠回りになるのですが、そもそも、職員・公務員が郷土史を学ぶ機会が社会人になっちゃうとないですね、という課題も出てきました。例えば、京都市に勤めていても京都市で育っていないとか、自治体に勤めていても、よそから来ている人が多いので、実は郷土史をみんなで共有できていないのではないか、という問題提起でした。それに関しては、職員研修の形でプログラムを作っているところもありました。やっぱり文化財保護課からの働きかけで、文化財というのがいかに大切な資源であり、将来の活用も見込めるということを全員に共有してほしいですね、という話になりました。もう一つは、補助金など行政からの支援の仕組み。これは、文化庁の中だけでも補助金がいくつもあります。それから、国交省など他の省庁にもあります。どこをどう使ったらいいのかがよくわからないという悩みも出てきました。文化庁の方が、これに対しては文化庁も相談に乗るとおっしゃって下さいましたし、また、一つの提案としては、ワンストップサービスのような形ですね。文化庁の誰かに相談すると「じゃあこの件はあっちに相談してください」ではなくて、ある程度全体像を教えてくれる、福祉でいうとケアマネジャーみたいな人がいると良いですね、という話になりました。

二つ目が「ネットワークの問題」。歴史構想、地域計画を策定してこれから協議会を作るという自治体からは、どうやって立ち上げたらよいのでしょうか、という質問が出ました。それに対して、答えとして面白かったのは、その組織に対してメンバーを出してくださいというやり方ではなく、この人に参加してほしいのでこの人がいる組織にも参加させてくださいという、組織からではなく人からメンバーを集めましたという事例でした。やっぱり、お互いに顔を



佐藤千晴先生→

合わせること、顔をつなぐこと、というのが地域で何かをやっていく上ではとても大切なことなのだと思います。協議会に各部署の課長クラスに遍く参加してもらうという戦略を立てている自治体もありました。市役所の内部でネットワークがあり、プラス外部の人たちのネットワークがあるという二重構造で分科会のようなやり方で話を進めていくというやり方もあるよ、ということでした。

それから三番目が、文化財を具体的にどう活用していくのかという点。2つの質問が出ました。一つは、VR、AR です。既に先ほどの発表でもありました下野市の例がありますので、一体どのように VR、AR は設計していけばよいのかという質問が出ました。もう一つは、個人所有の文化財、所有している方にどうやってモチベーションを高めていただいて公開などに協力していただけるようになるのでしょうか、という質問が出ました。これに対しては、萩市から、地域の皆さんに常時公開するのは大変だけど年に 1 回くらいなら公開してもいいよという合意ができて、年に 1 回「おたから」を見せていただく「おたから博物館」という定例の行事になった事例が紹介されました。1 か所で始めると、なんとなく「じゃあうちも公開しようか」と地域の皆さんが自発的に立ち上がってネットワークができてきたよ、という話でした。

「観光」という大きな言葉はありますけれども、皆さんの話の中から浮かび上がってきたのはいろんな意味での「観光」があるということです。インバウンドが押し寄せてくる「観光」がある、他地域の人たちが長い時間滞在する「観光」がある、近隣の人たちが楽しむような「観光」もある、あるいはその地域に暮らす人たちがする「観光」というものがある、いろんなレベルで考えられますね、という話が出ました。以上です。

【西山】

はい。ありがとうございました。それでは C 班の菊池先生をお願いします。

【菊池】

続いては C 班なんですけど、昨日に引き続きまして、観光との連携をどう図るのかということ、あるいは文化財を観光資源として活用するにあたってどうあるべきか、というような議論をしてまいりました。意見としては、文化財と観光がやはり何とかして連携を密にしなければいけない、密にするだけではなくてお互い協力体制を作らなければいけない、という話が出ております。もう一つは、一言で観光といったときも、文化財を資源とした観光とその他の観光とでおのずから少し違う部分があるのではないか、文化財を観光資源として活用するときに使い捨てではなくて、持続可能な資源としての活用を図ることを考えるべきであろ

菊池健策先生→



う、という意見が出ておりました。それからもう一つ、観光資源として活用するとき、地元と活用する側とのパイプ役が必要である、と。それは、外部からということよりも内部の人間であった方がよい、というような意見も出ております。もう一つ、歴文構想でまとめたものの観光情報の発信、といったものを含めてどうあるべきなのか、満遍なく、誰もが対象となるように発信するというのはそろそろ考え直すべきで、ターゲットを絞り込んだ発信があってもよいのではないかという意見が出ておりました。

それから、もう一つは、文化財を指定・未指定を問わず資源として活用するときに、その活用の仕方の可能性がまだあるのではないかと。いわゆるバッファゾーンのようなものが、観光化することによっておのずと発生するものもあるのではないかと。例えば問題になっている空き家問題、空き家を宿泊施設として使っていく中で、文化財の中で言われてきたバッファゾーンのような存在のものが出てくる。文化財の周りを活用する観光が成立したりするというようなことも言われておまして、そういう話をしながら基本的に発信と、それから文化財と観光との連携をうまくしていく必要があるというようなところまで議論をして、時間となりました。以上でございます。

【西山】

ありがとうございます。バッファゾーンの話だけもう一度よろしいですか。

【菊池】

これ具体的にはですね、村上研究官からお話がいったんですけど、空き家を活用して宿泊あるいは客を入れる。その時に、空き家をその人たちが、あるいは地域のお年寄りが食事の世話をするという形で地域おこしにつながる。さらには、空き家を利用する人たち、空き家に泊まるような人たちに、周辺の山などの管理、手入れとかをしてもらう。あるいは、空き家の周りに広がっている耕作放棄地を観光客が耕作をして、最後の収穫祭まで行うような事例も出てくる。つまりは、世界遺産の構成資産本体とその周辺環境の広がりが自然と出てきている例もあるという紹介があった、ということでございます。

【西山】

はい。わかりました。どうもありがとうございます。はい、それではD班お願いいたします。

【池邊】

D班のメンバーは、選んだわけではないんでしょうけれど、今年中に策定しなければいけない、これからやらなければいけないという方が多くて、先ほどの西山先生のA班のようなところまでは話が及びませんでした。3つくらいの小グループに分けて、話をさせてもらいました。

一つは、どういうふうに住民に聞き取り調査をしたり、あるいは住民に参加してもらったり周知をしたりするか。色々な場面で住民の方々との付き合いが発生するわけですが、それをどういうふうにやったらいいのかというのが一番多くありました。それについては、先ほど神河町から発表があった「地域のたからもの」というこの地図、すごくたくさん載っているんです。守りたいもの、伝えたいもの、それから実際に歴史文構想を担当している方も皆さん1人とか2人とかで、「自分がいなくなったらこの村のそういう資源はどうなるんだろう」ということも含めて、守りたいものの伝えたいものっていうものを地域の方々に伝えて、それを出してもらったわけなんです。そこで冊子にするって言った時に、「自分たちのところから何も出ない」「守りたいものの伝えたいものは何もないのか」「そういうわけではないですよ」というような形でやりとりしたら、なんとこの歴史文構想の資料編が300頁にもなったという話をうかがいました。そういうふうにやっていると、本当に色々な伝えたいこと、守りたいもののいっぱい出てくるんだという話の一つありました。

それから、もう一つはですね、小さなまちで住民参加といってもなかなかボランティアガイドの成り手がいない。旧住民の方々みなさん仕事で忙しい。そこで、どういふ方々がボランティアガイドに出てくるかという、なんと新住民の方々が逆にボランティアガイドの会というのを組成して、実際に自分たちのまちのことを、新住民の方々ですから自分たちも学んでそれを他の人に伝えるということをやっているということで、それは非常にいい取組だという話になりました。あと、祭りの保存会。なかなか文化財という有形のものの思いがちですが、伝統の保存、祭りの保存みたいなものと、保存会がとても盛んだという

お話がありまして、そういう方々に、祭りの時以外にもどんどん出ていただいて、祭りをアピールしてもらって町民全体を盛り上げていく、というような話もありました。あと、住民を対象に文化財の歴史ウォークなどを開催しても、興味ある人や、高齢者しかなかなか来ない、というような状況でどういうふうにしていくかという中で一つ、参加費をとってその代わりに特産品を帰りにお土産に出すというお話がありました。これは別に、食品で釣るというわけではないんですけれども、特産品というものをどうやって出すのか、小さなまちですから同じようなものを出すところがたくさんあると思うんですね。そういうものをどうやって出すのか、何を出すのか、そういうことから会話が広がってまちの絆みたいなものが出てくるねという話もありました。それから一方で、壱岐の事例ですが、農業集落と漁業集落とで関係が希薄であるなど、他の地域の人たちの民俗文化などに全く興味がない。じゃあどうするかということで、「デリバリー・ミュージアム」というのを始めて、もう5年目になるらしいんです。そうしたら、壱岐から東京や大阪など、島外に出て行かれた方々で「壱岐人会」というのを結成されているんですが、この方たちから、「俺たちのところに話なかったじゃないか」という話が出てきたと。ですので、一回島や地域から外に出た方に、自分たちのまちの良さみたいなものをもう一度振り返ってもらうような交流が必要なのではないか。

もう一つは、なかなか皆さん日々の仕事で忙しく、全く話をする暇もないし、話を聞いてくれる人もいないし、ボランティアの成り手もないという非常に困ったなところがあります。その話の中では、マレーシアからまちおこし協力隊が来ているという話もありましたけれども、やはり地域の県立の大学ですとか、私の知っているところでは北海道なんですけれども、毎年いろんなところから大学のゼミを呼んできて、ゼミの学生たちに農作業や色々なことを手伝わせながら、夜やなんかはその地域の話を聞いたりする。そのような、若い人を巻き込むことによって、まちおこしをしていくそんな方向につながられるのではないかという話がありました。あと、難しかったのは、実はコンセプトのところでした。昔は、景観計画つくって金になるの？と言われましたけど、歴史文構想も、実際に観光につながっているところも勿論あるんですけれども、お金と時間をかけて何が得られるのかというところ。ここについては、地域ごとに考えるしかないということで話が深まらなかったんですが、私としては、先ほど前半にB班で話をされていたことが参考になるのではないかな、と思いました。

あと、最後に連携のことで、体制がなかなかとれない、観光の方と付き合うっていうのがとてもストレスになっているというようなお話が実はあったんですけれども、ここについては、やはり文化財の方って、結構地域を知ってらっ



←池邊このみ先生

しゃったり、地域の人にも知られていたり、そして庁内でも結構顔が売れていたり、色々な方々がいらっしやると思うので、コーディネーターにも、プロモーターにも文化財を地域資源とした営業マンにもなることができると思うんです。自分が地域の中でどのような役割を担っていくのかということを考えて、観光の人たちと向き合っていくことによって、連携体制がとれるようになるのではないかという話が出ました。以上でございます。

【西山】

はい、どうもありがとうございました。先生方に、今、それぞれにまとめていただいて、一つ一つが示唆を与えてくれている内容であったかと思いますが、最後に池邊先生がおっしゃったように、私も昨日最初に申し上げましたことで、やはり観光という分野の人たちとこれまで文化財保護法に専心して来られた方々が、今、無理矢理お互いがお互いに付き合わされているというようなところがあります。先ほども私たちの班であったように、それを乗り越える事例が少しずつ出てきているし、乗り越えたことによって、それまでお互いがバラバラでできなかったこともできつつあるのではないかと。しかし、今の最後のお話とかでも思うように、観光の方は文化財のことに手を出せないというか、理解はできても、文化財の価値付けや価値の保存・保全に関することはできないのです。でも、文化財の方はやっぱり頑張ったら観光のコーディネーターにも営業にもなれる、というそういう心意気の方がおられる。この会場にいらっしやる方々にも、躊躇している方、腹を立ててる方、あるいはそれは諦めているという方、ポジティブにやられてる方が同時にいるのかなと思いますし、国が進めてきた施策などが、今そういうところにどんどん放り込んでいって、大変な状況だなということがわかったかなと思います。

また一方で、協議会の色々な人集めの方法でありますとか、それから今いただいた色々な住民の巻き込みとか付き合い方とか、そういうところに様々なアイデアのご提案もあったかなと思います。

もうあと7～8分ですけども、みなさんの各班のことを聞かれて、最後にコメントあれば。佐藤先生からお願いしてよろしいですか。

【佐藤】

はい。2日間にわたり事例発表をうかがい、皆さんとお話をして、今、歴史文構想っていうのがどこを歩んでいるのかを考えました。多分まだ、歴史文構想ができました、こんなことをやろうと思っています、こんなことをやっていますという段階なんですよ。だけど次にいかなきゃいけないのは、こんなことをしたらこんな変化が現れました、反応が現れました、というフェーズです。K P Iなんかを掲げ

ていますけれども、数値に見えるものと数値に見えないものを合わせて、歴史文構想で何が地域に変化を起こすか、それを注意深く観察して検証していただく段階がもうすぐ来ます。さらに、こんなことをやったら、予想もしなかったこんなことが起きた、文化の用語で「波及効果」というんですけれども、たぶん思いもかけなかった結びつきができたり、思いもかけなかった人がいたり、必ず想定外のことが起きるんですね。その想定外を見届けて、歴史文構想自体をまた次のステップに持って行くっていうのを持続していただけたらな、と思いました。

【西山】

どうもありがとうございました。まさに、K P I、評価指標というものを考える時限、計画が時限化されるという点においても、それを考えなきゃいけない段階にきているというお話と、予想もしない波及効果、インパクトといってもいいのかもしれませんが、そういう生じたインパクトというものを内包した次の段階を考えなきゃいけない。でも、今からどんなインパクトが起きてくるのかということ意識することが重要であるというご指摘だったかと思います。

私も昨日申し上げたように歴史文構想をやったからこそ担当職員の方の専門を超えたつながりとかネットワークが作られてきたというのは皆さんがご経験されてきたことでしょう。それを、どういうふうに正のインパクトに転換していくかということが大事なかなと思いました。ありがとうございます。それでは、菊池先生。

【菊池】

昨日今日と議論をする中で、あるいは議論を拝聴する中で、どうも理想としていた考え方、総合的把握というものがあつたわけですけども、特にその中でも形のないものをどうやって計画に盛り込んでいくのかは厳しいのかなと改めて感じておりました。ただ、祭りとかそういったもの、人を取り込むことのできるものでもあるし、あるいは、目に見えない形で年々変化していく部分もある文化財ですから、そういう意味ではまだまだ可能性を秘めているのではないかと。あるいは、切り口として祭りとかそういったものが出てくる、あるいは素材として存在しているということがいえるのではないかな、というふうに思ってます。そして、それをうまく使っていくというか、この歴史文構想なり地域計画の中に取り込んでいって人と人とのつながりがよりわかるように、見えるような形ができるといいなと思ってお話を聞いておりました。

【西山】

はい。ありがとうございました。ややもすると、どうし



西山徳明先生→

でも保存活用区域とか空間的、不動産・有形的なものにどうしても目が偏りがちというか、そうなりがちな歴文構想です。そうでないと言いながらも、いつも菊池先生がおっしゃるように、そこできちんと無形の部分も大事に考えるし、考えなければいけない。先ほどもおっしゃったようなそこにこそ人が見えるし、そこに人と人とのつながりができるのも見えてくるというふうなこと、変わり続ける文化財ではあるけれども、そういう動的な価値というのでしょうか、そういうものを、しっかりと歴文構想を考えていく上で私たちも常にきちんと認識を持ってやっていかなければいけないということを教えていただいたと理解しました。ありがとうございました。それでは池邊先生。

【池邊】

ここでずっと観光とかインバウンドとかっていう話があったと思うんですけども、日本遺産とかそういうものの影響かもしれないんですけども、でも、皆さんお気づきのように、やはりもうマストツーリズムの観光という時代は終わると思うんですね。多分それは東京オリンピックがあって、その後くらいから、私たちの世代からは、もう観光バスで行くなんていうのは日本人もしませんし、ましてや外国人たちも、そういうことをしなくなっている。その時代がまさに歴史文化が今度は生きてくる時代だというふうに私は思っています。そういう時に住み続けたいまち、徳島県の祖谷とかああいうところに外国人の方が住んでらしたりとか、移民しようとかそういう方がいらっしたりとか色々な外国人の方が日本のすごく辺鄙なところに住まわれたりしていますけれども、そういった意味で日本というのをもう一度いわゆる観光という言葉ではなくて、本当に資源としてどういうふうに発信していけるのかという、その辺のことが多分次の10年に来るんだろうなというふうに思っています。そういったときに、一つ私は日南市の事例を見た時に、伝建っていうのをカタカナでやってるっていうのがすごく印象に残ったんですね。これ伝建の先生たちに怒られるんじゃないかなって思いながら、文化庁さんも色々議論があったんだろうなって思いながら、でも、ちょっと見ましたらここに「日南学園高等学校」「宮崎大学地域支援創成学部土屋研究室」という言葉が入っておりまして、先ほど私も他のところで大学に入ってもらった

らどうかという話をしたんですけども、やはり、今まで文化財というのは、どちらかというと高齢者の方々によって引き継がれ、守られてきました。でもこれからはやっぱり京都の事例なんかでもありましたけれども若い人がいかに文化財というものをある舞台としてどんな活動をしていくのか、例えば、私講演の仕事をしていますとやっぱりウェディングなんかは当たり前になってるんですけども、例えばファッションショーなんかは、その地域の染め物であったり、それからそこで採れる石だったり貝だったり、様々なものを素材にすることができます。それから、小さな体験ツアーというのをやっているところが多いというのを聞きましたけれども、そういうものも、紛い物でない本当の意味の体験というものがその地域に行っていくことができるということを考えると、多分、次世代の若い人を引っ張ってこれるものになるのではないかなと思いました。ここ京都に来て、たくさん着物を着た外国人さんがいっぱいいらっしゃるわけですけども、逆にその時代はそう長くは続かないと私は思っておりまして、その次には日本の本当に美しいモノがインターナショナルに評価してもらえるように、是非若い人に文化財を支える人たちになってもらえるように、これは文化庁さんからなかなか文科省に通じていかないんですけども、是非ともそういう教育が小中学校からそういうものが入っていくようにお願いしたいと思います。以上でございます。

【西山】

ありがとうございました。先ほど、職員の郷土史研修の話もありましたけれども、そういう教育の話も大事だと思いました。本当に先生方どうもありがとうございました。特に時間もありませんのでまとめることはいたしませんけれども、2日間の議論を通じて、今日も2回に分かれてのグループセッションの中でも非常に色々な重要な意見交換があったと思いますし、我々のパネルディスカッションを通じて、もしかしたら何かヒントを得ていただいたかもしれません。でも、多分こういうことを相談したいならあそこの自治体の人に話を聞こう、なんていうような目星がだいぶついたのではないかなという意味で、この会は、大変成果が上がったのではないかなと感じております。昨日から何度も言っているように、この会議は画期的というか、何十年後に今回の集まり、最初の集まりの意味というのは評価されると思いますが、ここに集まっている皆様がこれからこの協議会を盛り上げていくことに貢献していただけたらということが、私の最後の、またスタッフ側として皆さんへのお願いでございます。

それでは、これで私たちのパネルディスカッションは終了させていただきたいと思います。どうもお疲れ様でした。